

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月 30 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520720

研究課題名（和文） 近代南アジアにおける消費と社会編成

：軽工業製品の政治的物象化を焦点として

研究課題名（英文） Conjunction between Consumption and Social Transformation in Modern India with a Focus on Political Representation of Key Consumer Goods

研究代表者

大石 高志（OISHI TAKASHI）

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70347516

研究成果の概要（和文）：

近代インドにおいて際立った政治性を帯びた商品、特に、マッチ、装身具（特にガラス製）、タバコ（特にビーディーと呼ばれる在来型）などの特定の軽工業製品を取り上げて、その流通と消費の文脈を重点的に研究することにより、そうした商品に結びついて表象されたナショナリズムやジェンダー、経済的な競合・階層などの政治・社会的な動態を捉える試みをおこなった。特に、近代西欧や日本で製造技術や商品の開発が進んでインドへの輸入品であった商品に、デザインや外装などの面で独自のアレンジが施されて、インドの社会編成とその変動に対応した「在地化」も伴う国産品化とその消費が生じた過程を、具体的に検証することが出来た。

研究成果の概要（英文）：

This academic project concentrated on investigating the nexus between the commodities and socio-political representations in modern India through taking the examples from some specific commodities which strikingly accompanied socio-political connotation in connection with nationalism, gender, economic contestation. Concrete commodities put under analysis included matches, glass ornaments and beedi(a sort of indigenous type of cigarette). In particular, it successfully illuminated the process in which the commodities which had been invented/developed in foreign countries like Europe or Japan underwent some kind of “vernacularization” through the arrangement of designs, labeling, etc., and thereby collaborated with the socio-political as well as economic dynamism of modern India.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：インド・商人ネットワーク・軽工業製品・消費・ナショナリズム・環インド洋世界

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を始めるに先立って、自身の研究で、1890年代から1920年代にかけて日本からインドに輸入されたマッチの貿易・製造・流通に、日本（神戸など）在住のインド人商人が深く介在したこと、そして、それに貼付するラベルにおけるモチーフの選択や創造などにおいて、同時代のインドの社会・政治・経済的事象への高い連動性があることを見出していた。

(2) 上記のような意味での商品に物象化された政治・社会性という文脈を、近代インドにおいて、他のいくつかの商品にも見出すことが出来るのではないか、との感触を、既入手であった史料や既存研究の調査などを通じた自身の予備的な研究で得ることが出来ていた。これにより、商品とその表象を介して「交渉」された社会・政治・経済的な動態という局面に光を当てるべく、本研究を計画した。

(3) 研究執行者は、従来から、インド人商人が環インド洋世界や日本を含む広域アジアに擁した広域ネットワークの研究を進めていた。次の研究の段階として、こうした広域ネットワークがインドに対して、どのようなフィードバック的還元作用を与えたかを明らかにしたいという動機を有していた。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、具体的に、マッチ、装身具（特にガラス製）、タバコ（特にビーディーと呼ばれる在来型）などの特定のいくつかの軽工業製品を取り上げて、それらについて、製造のみならず、流通と消費の文脈に検証を加え、特に、政治・社会・文化的な表象との連関について解明を試みることを目的にした。

(2) 植民地支配下の近代インドでは、ナショナリズムやジェンダー、経済などの様々な競合的局面と連動して、社会変動が生じたが、本研究で焦点を当てている商品に表象された「物象」は、そうした社会変動が帯同した葛藤や矛盾、背理などを具体的に解読する有効な検証材料であると想定した。本研究で想定した史料群の1つである、商品デザインや広告媒体の資料は、こうした未開拓の研究分野を開拓していく1つの有効な手段ともなるという想定がある。

(3) 近代インドで、ナショナリズムの台頭

とともに、外国製品ボイコットや国産品愛用というかたちで、ナショナリズムの表出が見られたことは周知されてきた。しかし、実際には、インドの市場には、外国製品でありながらインド市場に流通し続けた商品や、インド国内で製造されてはいたが、外国からの資本やそれとの合弁によって成り立っていたり、外来のデザインやモチーフに依拠もしくは模倣していたりした商品が、極めて広く流通していたことを、自身が従来の研究上関わってきた軽工業製品の事例で了解していた。ゆえに、本研究では、伝統的産業品ではなく、敢えて、軽工業製品に焦点を当てつつ、前記(2)でふれたような葛藤、矛盾、背理などを、照射することを目的とした。

(4) これまでのインド近代史の研究の蓄積では、政治史、経済史、文化史といった領域の間に分断的な境界があったことは否めないが、本研究では、商品とその社会・政治的表象という問題を起点にして、そうした分断を越えてインド社会に関する統合的把握を目指すという意図を有した。

3. 研究の方法

(1) 商品に付随する新史料の探求：本研究では、新史料の探求を、大きな課題もしくは使命として意識していた。具体的には、商品の流通と消費に関係する資料を、19世紀末から1930年代までの期間の広告や広い意味でのマーケティング媒体に遡及して探求することを目標とし、実際に、既入手の史料に登場する商人・企業家とその子孫や後継企業家、さらに、業界団体をインド各地で探索・アクセスするなどして、そうした史料を入手する努力を続けた。

(2) 文書館史料との統合的研究：植民地政府は、商品とその消費に関して、関税や物品税、広告規制、営業許可、標準化、衛生規制など、様々な側面で、関係を有しており、本研究は、そうした関係の行政資料を文書館で遡及する努力を行った。具体的には、インドで、国立公文書館（デリー）、国立文書館定期刊行物専用分館（ボーパール）、マハラシュトラ州立文書館（ムンバイ）、さらに、イギリスで、ブリティッシュ・ライブラリー（特に、インド省文書：ロンドン）、国立文書館（ロンドン/キュー）、シェフィールド大学付設文書館（シェフィールド）、ピクトリア・アルバート博物館（ロンドン）などで、資料調査を行った。

(3) 地域横断性に即した研究：「研究の目的」にもふれたように、本研究では、近代インドに流通した商品を、地理的な意味でのインドだけに限定した関係性のなかで捉えてはならず、むしろ、史実に即して、素材やアイデア、資本などが地域横断的に交わったうえで成立したものとして捉えている。このため、マッチに関しては、1890年代以降インドを主要輸出先の1つとし、1920年代以降はインド工場を有したスウェーデンおよび日本、ガラス装身具に関しては、1900年代に同様の関係性を有したチェコと日本を、研究対象に組み込んだ。そして、本研究の中で、スウェーデンおよびチェコに赴き、史料調査を行った。

(4) 学術交流と成果発表：本研究が取り組む研究テーマでは、国際的な学術交流が、非常に有効かつ有益な手段になる。まず、研究対象に設定した特定の軽工業製品の地域横断的な成り立ちに即して、必然的に、インド以外の第3国（具体的には、日本、スウェーデン、チェコ）の産業史や社会・文化史の研究蓄積に架橋する必要がある。そして、南アジア近代史研究では、本研究で掲げている消費という主テーマに対して、昨今、一定の関心が向けられており、共同研究的な連携が有意義な成果を生むことが、あらかじめ、予見できる状況であるからである。ゆえに、本研究では、自身が起点となったうえで、国際的な学術交流を、ワークショップの開催という形で、押し進める形を取った。

4. 研究成果

(1) 新史料の収集：本研究で分析の対象としたいくつかの軽工業製品（マッチ、ガラス装身具、ビーディなど）に関して、企業家とその子孫、業界団体への直接のアクセスなどを通じて、史料収集を行うことが出来た。こうした業種では、大規模事業化や組織化が進まなかったために、従来は、史料的研究の障害が生じてきた面が大きかったこともあり、それを克服していく意味を有する。

この中には、個別事業者レベルの販売促進用カタログや店頭・街頭での展示販売ポスター、会計簿、商業通信、景品などがある。

(2) 商品に付帯する政治・社会的表象（ナショナリズムと中下層）：従来から自身の研究で部分的に看取出来ていたマッチに付帯する政治・社会的な表象の問題を、他の商品にも、具体的に確認しながら、その具体的な意味を検証する作業を押し進めることが出来た。

とくに、ガラス製の腕輪（バングル）や数珠に関して、1900年代から、従来の金メッキ

製や銀製の製品よりも相対的に低価格帯の商品として急速に普及した事実を明らかにすることが出来た。また、ビーディに関しては、在来の水タバコ（フッカー）や噛みタバコ、さらに、19世紀末以降の輸入シガレットを代替もしくは並立・補完する文脈で、19世紀後半以降の近現代インドで急速な普及を見たという歴史的な位置付けが得られた。また、ガラス装身具とビーディのいずれにも関して、その政治・社会的背景として、一方で、社会改革運動やナショナリズム（ガンディーも含む）などの影響を受けたエリート層の嗜好の動態、他方で、経済・社会的な中下層やトライブなどの人々に見られた新しい消費動向を反映したものであることが示唆された。

(3) 外国製品/国産品の境界的領域と「在地化」：本研究で扱った軽工業製品は、いずれも、その起源や製造地が、当初はインドではなく、輸入品であった。本研究では、こうした商品が、スウェーデン運動を含むナショナリズムの台頭やインド人起業家の成長によって、部分的に国産化されつつも、資本やデザイン、素材・原料、消費に伴うアイデアなどの面で、相当部分、外来的な要素を付帯し続けたことを明らかにした。その上で、そうした外来的要素を包摂しながらインドでの様々な消費に接合した商品を市場に提供する「在地化」が施されていたことを、本研究は、明らかにした。つまり、いわば、外国製品/国産品の境界的領域を、こうした意味での「在地化」が創出していたと考えられる。

(4) 国際ワークショップの組織と開催：本研究に掲げているような消費とその社会・政治性というテーマに関係付けて、国際ワークショップを組織・開催することが出来た。1回目は、本研究プロジェクト2年目に、英国（ロンドン）で「多様性を梃子にした経済発展」と題するワークショップを、「頭脳循環プログラム」(NIHU プログラム) など各種の研究プログラムの協賛の下で、中心組織者として開催した。また、2013年3月には、京都で、「歴史の中の商品多様性」と題する国際ワークショップを、「現代インド地域研究」(NIHU プログラム)の一環としての位置づけのなかで、中心組織者として開催することが出来た。自身が趣旨説明や個人ペーパーを提出したほか、いずれも、インド人研究者を含む国内外の研究者の参加を得て、本研究に関連する問題について、知見を深めることが出来た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 大石高志「ヒラーファト運動とムスリム商人・起業家のネットワーク」『南アジアとイスラーム—知的ネットワークと民衆運動—』(NIHU Research Series of South Asia and Islam 1号)人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」・NIHU プログラム「イスラーム地域研究」/「現代インド地域研究」連携)査読無 2013年1月、51-66頁
- ② 大石高志「ムスリムにおけるアイデンティティの複合性とその物象化:マッチ・ラベルからの検証」『南アジア研究』(日本南アジア学会編)22号、査読有、2010年12月、327-42頁

〔学会発表〕(計6件)

- ① Takashi Oishi, “A Historical Exploration into the Diversity of Commodities in Modern India: Matches, Glass wares, Beedis, Headgears” ペーパー22ページ分 [国際ワークショップ] Variety of Commodity in History: Social Dynamism, Networks and Colonialism” (NIHU プログラム「現代インド地域研究」、京都・京都大学、2013年3月26日)
- ② 大石高志「植林地産業都市ボンベイの外延部形成における新しい均衡と緊張 (1910-30年代):空間配置・労働集約型産業・慈善」『近代アジアにおける植林地都市と商業・金融・情報ネットワーク』(科学研究費補助金 基盤研究(B) 代表:脇村孝平)研究会、大阪・ホテルコスモスクエア国際交流センター、2013年3月17日
- ③ 大石高志「近現代南アジアにおける商品と社会:製造と消費をめぐる植林地期からの継承的構造を焦点にして」NIHU プログラム「現代インド地域研究」KINDAS「植林地経験と南アジア」第1回研究会、大阪・ホテルコスモスクエア国際交流センター、2012年10月27日
- ④ 大石高志「南アジアとイスラーム—知的ネットワークと民衆運動:討論」アジア政経学会2012年度全国大会、西宮・関西学院大学、2012年10月13日
- ⑤ Takashi Oishi, “Intervention of Glass wares in Modern India: New Phase of Production/Consumption in Ornaments and Perfumery Oils, 1900s-1950s” ペーパー18ページ分 国際ワークショップ INDAS・頭脳循環・「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」共催) “The Diversity-driven Path of Economic

Development: Small-scale Production, Commodity Consumption and Socio-cultural Representation in Modern India”、ロンドン・LSE/ロンドン大学、2012年1月28日

- ⑥ Takashi Oishi, “The Proliferation of Matchbox Labels in Modern India and the Socio-Political Entanglement, 1880s-1940s”、ペーパー19ページ分、NIHU プログラム「現代インド地域研究」国際ワークショップ “Media and Power in Contemporary South Asia”、大阪・国立民族学博物館、2011年12月17日

〔図書〕(計1件)

- ① 大石高志「近現代南アジアのイスラーム:デーオバンド派を焦点として」『研究シンポジウム30年の後(30 Years after 1979: Consequence of Iranian Revolution, Soviet Invasion of Afghanistan, Peace Treaty between Egypt and Israel)』、東京外国語大学、2010年、116-121頁 及び211-218頁

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
所属大学ホームページ
<http://www.kobe-cufs.ac.jp/institute/faculty/oishi.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大石高志 (Takashi Oishi)

研究者番号：70347516

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：